

The Sound and the Fury の第一章 における Image の二重性

平 田 博 士

I

私は *The Sound and the Fury* (1929) の全体像ではなく、敢えて、この作品の中心と思える第一章を扱うことで、Image の二重性について述べるものである。すなわち、第一章に表われる物言えぬ人物、白痴(Benji)の沈黙の語りの中に隠されている Imageこそ William Faulkner 作品の根本原理であり、自由に憧れる人間の証明を示し得ているからである。したがって、この章をどうしても考えない訳には行かなかった私は、この作品の全体を扱う前に第一章に対する考えを述べることによって、時間的現実と想像、回想の意識という Image の二重性を示すものである。

それは、あまりにもこの章に示されている Image が、作品の全体像、Faulkner 作品の原点、回帰点であると同時に、作品の結論までも暗示しているからである。もちろん、単に、第一章を読むだけで *The Sound and the Fury* を理解することも、全体像を示すこともできないであろうが、私はこの章の Image がこの作品の中心的命題を提供し、作品理解の一つの足掛りとなると考えている。大橋健三郎氏は「この作品を最後まで読みきってもいや最後まで読みきってさえ、彼が何物であるか、この作品のなかでどういう位置を占め、どういう意味をもっているかは、必ずしも分明ではない。そうしたことは、究極的にはむしろ読者の解釈と

判断に任せられているのだ」⁽¹⁾、と述べているように、この作品に対する解釈は、読む人がそれぞれ結論を出すことである。

「ベンジーの独白における主観の「連続した全体」と個別的な細目（アクチュアルな日付」と「出来事」）との独特な逆説的關係」⁽²⁾、と大橋氏が Benjy について述べるように、混乱した白痴の主観と事件の逆説関係こそ Image の二重性なのである。それは何の形式も時間的制約もないままに記憶の坂を登ると同時に、自からを中心とした人間の意識の力を自由自在に働かせ、一切の秩序も拒否するという時間の枠から切り離されて無限に主観的で自分の行動範囲の中で見、聞き、触れ、嗅いだことがきっかけとなって意識の時間的移動が行なわれ、作品中では Benjy の独白となり、言葉から解放され、自由に空間的時間的中立点に「昇華」されているのである。

人間に制約を与えている一つの社会的制約をも破壊し、無秩序の中に意識を投げ入れて純粹に意識や話したいことを述べるための一つの手段として、事物の核心を見透す目、存在のあらゆるものをありのままに眺め、語るための目として白痴の感覚にたよらざるを得なかったのであろう。Sartre は Faulkner の人間の中に「意識の中心に完全な闇を、私たちが自からのうちに完全な闇をこしらえることを夢見ている沈黙。私たちのそも沈黙私たちのうちも沈黙」⁽³⁾、と述べるように、物言えぬ白痴に語らせるという、言ってみれば「意識の複合性」を示しているものであり、逆に恐ろしいまでに人間の意識と社会生活の中にある制約の否定であるかのよう

-
1. 大橋健三郎著、「空白からの創造—『響きと怒り』」『フォークナー研究Ⅰ』，（南雲堂，1977），p. 201.
 2. 前掲同書， p. 203.
 3. Jean-Paul Sartre, 生田耕作訳「フォークナーの『サートリス』」『シチュエーションⅠ』（人文書院，昭和45年8月15日），p. 12.

でさえある。また、C. E. Magny には「人間は可能なかぎり、物、固定した、不動の物に似てくるし、一方では修辭語の助けを借りて、物はあたかも認識力をもち、意識をもったもののよう、微妙に生氣を帯びてくる。」⁽⁴⁾、と述べるように沈黙の世界、物の世界から抜け出ることこそ人間が、本当の「自由」を得ることになる。そこには意識しかないかも知れない。記憶の世界、すなわち、現在の時間的秩序、生活の秩序の破壊が行なわれ、意識は自由に制約のない世界へと突入するのである。

閉ざされた体内で意識は、自からを見つめ、思考と感情が一体となって外に飛び出そうとするようなものである。自分では、直接どうすることもできない世界に向かって、感情だけが複雑な動きをするのであり、目前に存在する状況に限定された範囲の中だけで現実の空間を突き破ろうとするのである。ある一つの線を持ち、その線にそって動くのであるが、その線に対する反応の変化が起きると意識は、まったく別の線にそって動き始め、瞬間的に凝結した大気が、何かに打たれて飛び散る時のように、意識もまた体内から飛び散るのである。作品中では、Benjy の記憶を呼び起し、現実状況を作り出す、

“Wait a minute,” Luster said. “You snagged on that nail again.” Can’t you never crawl through here without snagging on that nail. ⁽⁵⁾

と Benjy の意識は、過去にフラッシュ、バック (flash back) してすぐに過去の記憶へと向う。

Caddy uncaught me and we crawled through, Uncle Maury said to not let anybody see us, so we better stoop over, Caddy said. Stoop over, Benjy, Like this see. ⁽⁶⁾

4. C. E. Magny, 三輪秀彦訳「フォークナーまたは神学的転置」『アメリカ小説時代』, (竹内書店, 1969), p.195.

5. William Faulkner, *The Sound and the Fury* (London; Chatto & Windus, 1966), p.2.

6. *Ibid.*, p.2.

と過去の記憶の世界に向かい、過去と現在の遠近距離は、全くなくなってしまふ。意識的とか、意図的とかいう作為は全く見られずに、直接に過去に向かうのであり、過去が表面上に表われるのである。そこでは意識の単純化が行なわれ、現在と過去という両極の表面的一致と人間の根本的意識の表面化が起っている。人間の記憶の片隅のどこかに潜んでいる過去が表面に浮き上がるのである。つまり、ある種の衝撃が加わると、その片隅から飛び出して来て表われるのである。ここに Faulkner が示す人間的な混乱があり、どうしても逃げることのできない過去へ意識を向けることになったのであろう。Faulkner の示す人物は、このような意識を表面に表わすことで、人間性の本質的なものにふれる証拠を示したのである。

Faulkner は、人間の現在の立場を Quentine (第二章) に語らせて、

Father said a man is sum of his misfortunes. One day you'd think misfortune would get tired, but then time is your misfortune Father said. (7)

と人間を不幸の総和 “a man is the sum of his misfortunes.”、と語らせるのである。人間をそれぞれ現在に停止させて、意識だけを瞬間から瞬間へと移動させたのである。それはまるで沈黙の移動が行なわれ、意識の時間性だけが浮び上がって来るようなものである。しかし、この意識を別の角度から見ると、Faulkner の語る人物の意識は、非常に自己意識が高く、常に自己を見つめているのではないだろうか。それは取りも直さず、Faulkner 自からが思考する人間としての自覚であるだろう。「人間が不幸の総和」だとする Faulkner は、作品の上で意識のあるがままの構成を描出しなければならなかったのである。直接的感覚を描出するために、複雑な事象に対する情緒的態度を表現する過程を自から自覚しているからであ

7. *Ibid.*, p. 103.

る。

人間の意識は、永遠的存在であり、現実を制約するでありましょう直接的感覚に対する一つの描写である。すなわち、「ただこのような瞬間から瞬間へゆられていく意識は、最初意識であって、それから時間性をもつにいたるだろう。時間は外部からくると人は信じるのか。意識を意識たらしめる運動によって、意識みずからが時間となるという条件においてのみ、意識は《時間の中に存在》しうるのである。」⁽⁸⁾、と Sartre が述べるごとくである。Faulkner は Benjy に人間の意識を語らせると同時に、現在の状況をも語らせているのである。すなわち、Faulkner は意識とは決して静止しておらず、常に動いている状態であるという、意識と現状の状況とは時間的移動があるという一つの Image を描出したのである。ある事物を知覚すると、意識はそれにそって移動すると同時に、行動によって起る苦痛や満足を一つの転換として、新しい行為への刺戟となるのである。「ベンジーは、自分の意識に映る事物、もしくは事物的なものの諸イメージに対して、時間的、空間的にきわめてダイナミックな関係に立っている。」⁽⁹⁾、と中立的な立場に Benjy を立たせることで、人間本来の意識の純粹性を述べているのである。

この中立性を描写するために、Benjy を時間のレベルと空間のレベルに浮せ、まるで人間自からが、二つのレベルを同時に語ることの難しさを証明しようとしている。しかしながら、Faulkner は、その困難を乗り越えようと一生懸命であったのであろう。困難に立ち向うために、Benjy のレベルは意識的純粹性が必要となり、彼の意識は、沈黙の語り、すなわち、白痴であらねばならなかったのである。人間の意識の中には、常に自己中心

8. Jean - Paul Sartre, 前掲同書, p.68.

9. 大橋健三郎著, 前掲同書, p.199.

的性癖があるように、白痴によって本心を語るのである。本心とは、常に無形、無相であるはずであり、動きの変化を通し意識の内容を示すものである。「人は真や美や善の源としての本来の性、本心を見失って、その生活はくずれていきやすいものではあるけれども、しかもなお人は時として境によって触発される本心の「声なき声」，「隻手の音声」を聞いて、虚偽の渦巻く世界のさなかに真や善や美に触れ、人間らしさをとりもどすこともあるのである。」⁽¹⁰⁾、と本心をより純粹に描写するためには、中立性を持った思考のできない白痴に語らせることにより、分明に人間の意識を示すことができたのであろう。Faulkner は、白痴性そのもののの中に純粹性を発見し、白痴 Benji に沈黙の語りを行なわさすことによって、意識に対する一つの証明を行なったのである。

Ⅱ

The title, of course, came from the first section, which was Benji. ⁽¹¹⁾
と Faulkner 自からが述べるように、この作品の題名は、第一章から取られたものである。それでは、*The Sound and the Fury* の第一章の冒頭の場面を示すと、

Through the fence, between the curling flower spaces, I could see them hitting. They were coming toward where the flag was and I went along the fence. Luster was hunting the grass by the flower tree. They took the flag out. and they were hitting. Then they put the flag back and they went to the table, and he hit and the other hit. Then they went

10. 安藤正英著、「本心と自我」『アメリカ文学と禅』，（英宝社，昭和45年9月10日），p.90.

11. Frederick L. Gwynn & Joseph L. Blotner(ed), *Faulkner in the University* (New York; Vintage Books, 1959), p.87.

on, and I went along fence. ⁽¹²⁾

である。この場面から始まる第一章の世界では、読者は「私」という人物の視点に引き入れられるが、ものごとや自分の行動を客観的に観察しているわけではなく、Benjy の見るものを見、聞くものを聞き、嗅ぎ触るものを嗅ぎ触らせられるのである。このようにして始まる Benjy は、この作品の一章を語ると同時に、自分が何物で、どのような位置を占めているか、どんな意味があるのかも明らかにされないのである。

.....I don't know what the average reader gets from reading the book. I agree that what I tried to say I failed to say, and I never have had time to read reviews so I don't know that impression people might get from the book. ⁽¹³⁾

と Faulkner 自身も作品理解と解釈を読者自身がすることであり、判断に任せると述べているように、白痴である「私」に物事の判断や観察ができるはずもなく、ただ、物事を見ているだけの立場に立たせるのである。

自分の存在の意味さえ理解していない、冒頭の Benjy の独白をもう少し考えて見ると、彼は決して具体的にゴルフについて述べてはいない。単に、“They hit”, “the flag”, “the table” という言葉が出て来るだけで、これらの言葉から読者が、場面を具体的に判断するだけである。実は、ここに白痴の独白に深い沈黙の語りが隠され、作品全体に覆い被さって、全体と緊密に響き合い、きわめて鮮かに全体像が浮き上がり読み取れるのである。Benjy の記憶が明らかにされる場面をもっと明らかにして見ると、彼の意識は、まるで生きているかのように、例えば Luster と一緒に “fence” を通り抜けようとするとき、

12. William Faulkner, *op. cit.*, p.1.

13. Frederik L. Gwynn & Joseph L. Blotner(ed.), *op. cit.*, p.4.

Caddy uncaught me and we crawled through. ⁽¹⁴⁾

過去が甦って、過去の意識がまるで現在であるかのように生き生きと彼の心を捉え、逆に現在が、過去の意識の “flash back” を示すようになる。まるで Benjy の意識は、時間的空間の間に存在するかのようで、人間の現在生きている、そして現在の状況を意識しているかのようには過去の記憶の世界へと向うのである。常に現在が中心であるはずであるが、一瞬の連続性によって過去が中心になる。もし過去が中心となることができるならば、それこそ意識は、自由に飛ぶことができるであろう。

この「自由」を Faulkner は、白痴に思考させたのであるのだろうか。彼はなぜ白痴に語らせなければならなかったのだろうか。

That began as a short story, it was a story without plot, of some children being sent away from the house during the grand mother's funeral. They were too young to told what was going on and they saw things only incidentally to the childish games they were playing, which was the lugubrious matter of removing the corpse from the house, etc., and then the idea struck me to see how much more I could have got out of the idea of the blind, self-centeredness of innocence, typified by children, if one of those children had been truly innocent, that is, an idiot. So the idiot was born and then I became interested in the relationship of the idiot to the world that he was in but would never be able to cope with and just where could he get the tenderness, the help to shield him in his innocence. I mean “innocence” in the sense that God had stricken him blind at birth, that is, mindless at birth, there was nothing he could ever do about it. ⁽¹⁵⁾

14. *Ibid.*, p. 2.

15. Robert A. Jelliffe, (ed.), *Faulkner at Nagano* (Tokyo; Kenkyushia, 1962), pp. 103—105.

と Faulkner は述べるように、現実を知らない、また知ろうとしない子供にとって “truly innocent” であって “self-centeredness of innocence” であればならない人間を示すことで、その人間は一体どのようにして現実社会と関わることができるのだろうか。ここに白痴を設定することで、より小説の効果が示されているのであろうか。一つの運命が与えられているとするならば、白痴とは空白の一点に置かれ、何も思考することができない人間に世界を観察させるとは一体何であるのか。すなわち、「白痴のまったく中立性、従ってまた、どうにもならぬ両面価値的な空白と沈黙こそが、いっさいの出発点」⁽¹⁶⁾、となっているのである。少なくとも、Faulkner の作品へのアプローチは、沈黙と空白という何の色も持っていない人間を発見することである。この人間に語らせるということによって一つの「自由」への挑戦を試みていることを見ることである。思考の原点への回帰を求めていることを理解することによって、Benjy の存在価値は十全に理解できる。

それでは、白痴 Benjy の沈黙の語りとは一体何であるのか。現実的には “moaning” ブーブーという音であり、意識としての過去の記憶の語りである。この意識を彼が持つきっかけは、音である声である。一つの呼び “Here Caddy.” と先に述べたゴルフ場の場面からしても、

Luster said.....Husk up that moaning. ⁽¹⁷⁾

と呻き出し、過去の記憶の場面へと飛躍的に意識は入り込む。ただ、彼の呻きは、Luster によって語られ、決して自から語るのではない。記憶の場面に突入する彼の意識は、作者自身の意識ではなく、現代の混乱をそのまま語るための一つの方法である。Faulkner は、このような形式でしか現代を語ることはできないとでも言っているようである。人間に語りを拒絶させながら創造と破壊、肯定と否定という両極を沈黙の語りで示したの

16. 大橋健三郎, 前掲同書, p. 207.

17. William Faulkner, *op. cit.*, p. 1.

である。そこには作品において問題としている意識を解決するための、意識的時間の徹底的な崩壊が行なわれ、混乱にどうにか直面しようとする作者の努力が読み取れる。社会に対する一つの Image として、また作品理解のために、多くの批評家に取り上げ、Faulkner 自からも、一つの足掛りを述べる。

He went and pushed Caddy up into the tree to the first limb. We watched the muddy bottom of her drawers. ⁽¹⁸⁾

すなわち、“muddy bottom of her drawer.”こそ純粋な社会も見えない裏のところでは、汚れを持っていることの象徴を提示しているのである。“muddy bottom of her drawer.”を語ることができるのは、人間として中立点に立っている白痴であらねばならなかったのだろう。社会の混乱の中で、おそらく現実には耐えられる者として、現実の制約の中で、現実の状況をもう一度再発見するという立場で観察するのである。そこには、逆の立場として Ouentine が示され、Caddy という現実の時間に押し潰され、耐えることもできないままに死へと向う姿が示されるのである。現実の絶望と虚無の中で耐えることもなく時間に制約されたままに語ること、時間と一緒にしてしまうのである。

このように Caddy という純粋な中に汚れを見た Faulkner は、どうしても一つの結論をじっと耐えながら語るためには純粋な汚れを知らない目が必要であったのである。白痴に一つの出発点を見つけ、回帰点を求めたのである。それは人間を悪と罪から解放する理想郷である立場に押し上げるための方法であったのである。白痴が人間性の本質的な性質において社会を悩ます汚れからの解放と意識の純粋性への昇華となったのである。悲惨な現実を満たされている社会の中であって、理想とすべき「自由」へ

18. *Ibid.*, p. 37.

の広大な挑戦であることから、孤独と無力を痛感することもなく意識を過去に向わせる人間としては、沈黙を保つことのできる人間、白痴が一番の理想であった。彼に人間の意識を持たせるが、意識は静止したままで記憶を語る。

Despite the apparent chaos of fragments, Benjy himself lives in a world which is inflexible and rigid. The extent of its inflexibility is indicated by his bellows of protest whether over a wrong turn taken by Luster, Caddy's use of perfume, or her sexual promiscuity. ⁽¹⁹⁾

，と Vickery が述べているように、白痴は自から現実の世界に住むが、現実の悲惨さから自からを防衛するための方法として “bellows” を持って自分をこの社会の中で保持するのである。Vickery も示すように白痴の世界は、静止の世界で、その中だけで意識を混乱させている。それは自からの世界を語る時のみ、まるで意識は生きているかのように時間的空間の世界を作り、嗅覚的、聴覚的視覚の世界へと意識は登り始める。感覚領域を飛びこえることはできないが、白痴の諸感覚は、対照に対して鋭い反応，“Caddy smelled like trees.”，“Caddy smelled like tree in the rain.” と感覚領域の中で静を取りもどすのである。Lawrance Thompson は、白痴 (Benjy) の直観力について、

Repeatedly Ben is represented as having the instinctive and intuitive power to differentiate between objects or actions which are life-encouraging and others which are life-injuring,.....⁽²⁰⁾

19. Olge W. Vickery, “Worlds in Counterpoint : *The Sound and the Fury*” *The Novels of William Faulkner*, (Louisiana ; Louisiana State University Press, 1964), p. 31.

20. Lawrance Thompson, “Mirror Analogues in *The Sound and the Fury*”, Edited by Robert Penn Warren, *Faulkner* (New Jersey ; A Spectrum Book, 1966), p. 112.

と述べる。二つの事物に対して直観的に反応し、感覚領域の中でのみ判断をする白痴の規定された意識の中から脱け出すこともできずに、空間に浮いたままに時間の進行を観察している。白痴の発する呻きに対応する時間の相にまで人間の意識が流されこみ、生の総体の深みに入ることによって連想の自由を回復するのであると同時に、信じがたいほど広範囲な現実の時間の中で不確実な意識の Image が、瞬間から瞬間へと移動しているのである。

このように、Benjy を中心とした二つの Image “We watched the muddy botton of her drawers.”⁽²¹⁾、という純粹な現実の混乱と意識の静止との相違と空間に浮かぶ意識の Image という二つの Image の二重性が表われている。蟻二郎氏は「手を加えない二次元の空間」⁽²²⁾、と述べるように視覚的な物の世界の Image 化が行なわれているのであり、白痴の Imageこそ無時間の現実の中で移動が起っているのである。意識の過去への移動こそ沈黙の語りであろう。

Ⅲ

「フォークナーは事物の中心そのものに、凍りついた速度をとらえるように思われる。彼をかすめるのは、色あせ、後退し、動くことなくして小さくなっていく氷結したほとぼしりである。」⁽²³⁾、と Sartre は作中人物に何かを与えている。作中人物の事物に対する反応から、連想における意識の連続性、そして浄化である。白痴 Benjy の場合を考えてみると、この意識は語ることはできない無意識の呻き出しに対応し、事物の要素自体を連想によって新しい対立を起し、不条理な対応をしているのである。

21. William Faulkner, *op. cit.*, p. 37.

22. 蟻二郎著、「＜白痴＞と＜夢みる者＞」『フォークナーの小説群』（南雲堂、昭和41年11月5日）、p. 67.

23. Jean - Paul Sartre, 前掲同書、p. 63.

Faulkner 自からも

I became interested in the relationship of the idiot to the world that he was in but would never be able to cope with and just where could he get the tenderness, the help to shield him in his innocence. ⁽²⁴⁾

と述べるように “Where could he get the tenderness, the help to shield him in his innocence,” と白痴では到底対処すべきこともできない世界の中で一体どのように生きるのだろうか。思考するこのできない白痴に対して Faulkner は、きちんと助けを出している。ここに作者の人間性が読み取れるのである。すなわち、Faulkner は、人間存在の事実を回避することを常に避けている。いつでも人間に対しての可能性、生存の条件を与えているのである。

確かに、人間の意識を自由に語るためには、沈黙の語りが必要であったのであろう。意識の静止と人間を時間的空間的空白の中立点に立たせる必要もあった。人間は可能性を求めて選択と行動、思考の自由を行使することによって、自からの存在の意味を捉える基礎を常に持つてはいるが、時間に圧死させられ、広大な幻覚の世界に意識を落とす Quentine と違って Benjy のように、現実の中で非現実的な社会の中を自から観察し、行動をする。だが、沈黙の語りで過去へと意識を向けることによって、人間が常に持っていたいとするいまひとつの人格、なによりも自分で自由に語りたいとする認識の助けとなる手を持ちたいのである。意識の語り、常に現実にあった語りと何の制約もなく自由に思考し語るという二重の関係が、ここで成立している。Faulkner は、作品に常に表わす人間愛こそ「自由」の中に人間を認めたがっていることである。すなわち、白痴の意識こそ人間の代弁者という役割を果たしているのである。

24. Robert A. Jelliffe, (ed.), *Faulkner at Nagano, op. cit.*, p.104.

現実の世界を白痴に見せると同時に、平静さも与える役割をする人物 Caddy が必要となって来る。だが、Caddy はと言えば、“the muddy botton of her drawer,” という Image が暗示する現実の世界を示すと同時に、白痴にとっての避難所であるはずの彼女の現実性、これこそ Faulkner の示すアイロニーではないのだろうか。避難所である彼女とは「やさしさ」や「助け」を持ち合せ、白痴にとっては

She smelled like tree in the rain, ⁽²⁵⁾

と何度でも彼の意識が過去に落ちる「助け」を出すのである。白痴の中立性の最後の防波堤でもある。Caddy もこの事を認めて、

You don't need to both with him.' Caddy said. 'I like to take care him. ⁽²⁶⁾

と述べる。Benjy もこれに答えるかのように、記憶の過去から抜け出る時も、過去に落ちる時も Caddy なしには、そこから這い上がることが出来ないのである。まるで、Caddy が第一章の中に存在しているかのようである。あくまでも、この章は白痴の語りであって、Caddy 自体は現実には存在していない。むしろ不在によってのみ逆説的に白痴の「助け」となり、中立性の防衛を果たすのである。「何と言っても、キャディ像とは、作家がひたすら見つめた白痴の意識の「鏡」の中にこそ、まず映し出されたものであり、そのようなものとしてのみ存在し得、かつそのようなものとしてのみ生命と価値と意味」⁽²⁷⁾、をもち得るものである。このように Caddy 像からの Image は、何か暗い、何かに取り付かれた現実の裏を示しているかのようである。

それ故に、白痴の現実から

25. William Faulkner, *op. cit.*, p.17.

26. *Ibid.*, p.61.

27. 大橋健三郎著、前掲同書、p.208.

“Listen at you, now.” Luster said, “Ain’ t you something, thirty-three years old, going on that way. After I done went all the way to town to buy you that cake. (28)

と Luster によって語られるように、三十三歳の誕生日を迎えた Benjy は言葉を話すことができないままに生きているのである。この呻き声は、現実社会の中に対する何かの象徴を示しているのではないだろうか。Faulkner 自身、Benjy についての質問に

I looked it (the Bible) up and Benjamin was held hostage for Joseph. Yes, that’s why I used them interchangeably..... (29)

と答える。このように Benjy が聖書から、1928年4月7日という第一章の日付、復活祭の前日ということから宗教的な一面を暗示するものとしての受苦の呻きではないだろうか。白痴 Benjy は一体何ものであるのだろうか。すなわち、白痴に与えられている時間が、一つは主観的時間という意識であった。そしてもう一つの物理的時間としては、Benjy の姿、名前そして時計の示す「日付」の時間であろう。それは記憶効果と表現効果を示すものであり、二つの効果の対比から一つの小説の創造が起ったのであろう。現実社会という全体としては、白痴の世界を受け入れることのできない歪曲した世界がある中であって、白痴でならない理由は、どこにもないが、筋の通った条件が与えられていたとしたならば、人間の悲劇的な面は示されなかったのである。

ここに Faulkner が語る物語り、すなわち、小説としての世界がどんな条件をも無視した形で創造されたのであろう。そして Faulkner の描く人物の「運命」は、恐ろしいほどに現実から離れ、蟻二郎氏の述べる「手を加えられない二次元の空間」を漂っているのである。そこには到底不可能な世界、

28. *Ibid.*, p.1.

29. Frederik L. Gwynn & Joseph L. Blotner(ed.), *op.cit.*, p.18.

無意識の世界へと人間を落とす白痴の世界があったのである。無意識的願望の力を借りて、新しい現実を作り出すと同時に願望充足という潜在的願望までも表面に表わすのである。

すべての事柄に互いに密接に関連しあって、次々に新しい現実が表われて来るが、意識そのものは静止の状態で無意識的精神活動は、未来に向かって進もうとするのではなく、現在のままで混乱し、過去の記憶だけが新しい創造となるのである。まるでフロイトの「夢」の中に出てくるように「夢の要素については、われわれはそれが本来的なものではなく、他のあらゆるものの代理物である。……代理物とは、夢を見た人は自覚していないが、錯誤行為の場合の意向と同じく、その人の心の中にはそれについての知識が存在している。」⁽³⁰⁾ と述べる代理物の中で人物が行為を行なっているようなものである。

Faulkner は、人間性そのものの喪失の危機に対する警笛をならし、人間が自由に思考できるのは、白痴であらねばならないと言っているのである。ここに人間最後の砦を見つけたのである。すべては、現在と過去の深刻な対比によって意識をより分明にすることができたのであり、人間の人生におけるドラマを描くことができるのである。人間の意識と現実には、根本的に距離があり、理不尽な人間の行為に対する警告でもあるだろう。人が人間として開眼するべき時に、人間の意識の再生によって新しい意識が生まれるのである。究極の到達点として自由に記憶を巡らすことであろう。

数多くの衝動と、それに対応する効果的刺激が相互に影響しあうことで人間の記憶をより明らかにする。作品中では、過去の場面における子供たちの行動と現在の Benjy の行動が、あまりにも似かよっているためである

30. フロイト、高橋義孝・下坂幸三訳「夢の顕在内容と潜在思想」『精神分析入門』下巻、(新潮文庫、昭和51年)、p.141.

う。彼の記憶は、Caddy によって呼び起されるが、現実世界から彼を記憶の世界につき落とすものは、見、聞き、触れ、嗅いだりすることから起きるのである。「打つ」という言葉に最もよく集約されている「打つ」という言葉が指示する意味内容は、きわめて広く、しかも、この今の特殊な場合の「打つ」の意味内容を明確に規定し得ぬところに「ぼく」の白痴性一名づけ得ぬという白痴性の強い「沈黙」が巧みに暗示されている。」⁽³¹⁾、と大橋氏が述べるように、一つの刺激による白痴の記憶は、相互に影響しあって意識を作り上げる。それは、

Then they pus the flag back and they went to the table, and he hit and other hit. ⁽³²⁾

と言う“hit”のImage化であるだろう。「打つ」ことすなわち刺激が、Benjyの過去の記憶に意識を向わせるきっかけを作り出し、「打つ」というImage化が、一つの媒体となって「語る」という人間の生きた言葉となり、「沈黙の語り」の通路となっているのである。

IV

時間的レベルと空間的レベルの中立点に立つ Benjy の環境は、虚偽のはびこる現実世界の中であって、意識だけが生きている。意識的生命の人物として人間性が、過去から記憶だけが呼起され避けがたいほどの忍耐によって無形無相の純粹意識が表われて来る。例外なく二つの意識、すなわち、二つの自己の存在が外界からの反応によって人間を現実世界からの働きかけを直接受けとめることによって、心の変化が起きるのであり過去の記憶の中に意識は入って行くのである。いつも意識は、片隅にじっと潜在して何の動きもしようとはしないが、一つの衝撃が加わると新しい反応を待

31. 大橋健三郎著、前掲同書、p.193.

32. William Faulkner, op. cit., p.1.

っていたかのように、意識が表面に表われるのである。白痴 Benjy によって示された幻想と現実の接点に人間を立たせるという Image である。人間は現実からの逃避願望を持っているように、現実から遠距離に立って、現実を見ようとするならば人間は、すべて白痴であらねばならないだろう。また、幻想という一つの記憶の中に隠れることができるなら、白痴として現実から遊離しなければならない。二つのレベルは互いに触発しあって表面に表われるが、それは間断なく触れ合うことで純粹意識の中に入り、内的な分裂を統一することにより人間自身を救い出してくれると、Faulkner は述べているのである。

このように、Faulkner は意識を純粹に描出するために、空白の立場に人間を置くことで息づまるほどほどの緊張した内的意識を描出するのである。それは「日付」という現実社会における人間の本心をひたすら描いているのである。さらに重要なことは、人間の条件そのものに対する挑戦でもある。人間をより意識する Faulkner にとって、人間をより自然の秩序の中で捉えようとする、秩序の中で人間が真の機能を果たすことができることを、Faulkner はよく知っていたのである。人間の社会的運命を認識していたと同時に、おそらく人間の精神的秩序に目を向けているのである。

混乱した現実の社会と対立する姿そのものを文章化したのである。すなわち、浜田政二郎氏が、*The Sound and the Fury* について「なんという彫りの深さ、情感のみなぎり、しかも陰影はあくまで濃い。何よりも、魂をゆり動かす感動にわれわれはとらわれる。」⁽³³⁾、と述べるように人間の魂そのものの文章化である。Benjy の意識の Image を幻想と現実であるとしても、二つの Image の対立から、一つの空白点に立たせられると

33. 浜田政二郎、「アメリカ・ユートピア展望」『ユートピアとアメリカ文学』（研究社、1973）、p.207.

いう効果があるが、二つの Image の中立点に Benjy が立つことによって、Faulkner は人間の過去の記憶をより明らかにすると同時に、沈黙によって意識がよみがえるという効果まで探究するのである。故に、魂の復活がなされたのであり、人間が本来持っているであろう本心を表現し得たのである。そこには人間としては、実在感の薄い白痴によって表現されることによって、より現実のものとして伝わって来る。呻り声の持つより白痴性が、実体感と人間の意識の映像を映し出すことができると同時に、記憶という沈黙の語りの無気味さの闇の音は、現実離れをしている、が姿を見るためには一定の距離を必要とする。このことが一層読者である私たちに多くのことを想像させてくれ、一層深く人間の本質に迫ることを知らせてくれる。

この距離をおいて遠くから人間を見ることこそ人間を明晰に見られるのである。視覚が、白痴 Benjy の心理や意識の動き、潜在的意識の作用を感覚として、むしろ感覚を呼び起す対象として社会の事件を見つめることこそ、人間生活の根本的なものとして映るようになるのである。この視覚を過去の記憶への入口として、沈黙の世界に深く入る一つの意識作用となるのである。沈黙と不動の闇の語りから人間の記憶作用の効果が示され、潜在的意識の Image と現実社会の感覚的 Image によって表われた一つの人間存在の無感動な感覚による冷たく硬い Image が、Faulkner によって白痴を通して描かれたのである。見えない意識の内部にまで手を引き入れ、人間の本心を求めて内部を探究しようとしているのであり、人間の本心である意識を表わしたのである。大橋氏は、Benjy について述べる最後の言葉として「この「ぼく」ベンジーの空間的移動(運動)の幻覚は、「ぼく」の記憶の時間的飛躍とともに、あるいはそれ以上にきわめて重要である。なぜなら、この幻覚は、現在の時間における空間的広がり of 所在を暗示すると同時に、その現在と記憶の飛躍をするさまざまな過去の時間との間の

対比緊張を生みだし」⁽³⁴⁾、と述べるように、二つの Image による対比によって沈黙の語りという意識の分明がより一層深い意味を持つと同時に、人間の意識の純粹性を表わすことの困難をみごとに表現したのである。人間が純粹であればあるほど、その意識は沈黙の語りとなり、本心となるのである。また、その本心を表現すれば、そこには常に白痴性が存在することを Faulkner は語りかけているのである。そして混乱した意識を混乱したままで表現するために「日付」のない無時間の過去の記憶の中に人間を存在させ、白痴性を持たせたのである。ここに Faulkner の求めに白痴性の Image、すなわち人間の本心を表現したのである。

34. 大橋健三郎著、前掲同書、pp.199—200.